

②ジゴロと治具

ヴェネチアで映画三昧の齋藤敦子さま。映画祭もそろそろ終幕に近づく頃でしょうか。今年の収穫はいかがですか。

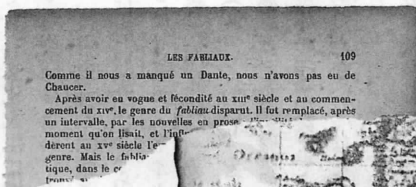
去年、敦子さんが一票を投じたとおっしゃっていた「メント」、日本でも当たりましたね。でも、その後のガイ・ピアースがどうも期待外れで。個人的には「ガイコツ」・ピアースよりも、「プリシラ」当時のキャピットしたピアースがもう一度見たいものです、それこそジゴロの役をやらせて「ちよっと素朴」が売りのオーストラリアン・ジゴロ、いいかもしれません。

前回、敦子さんから提示された「イングリッシュ・ジゴロはアリか？」の問いを受けて、強引にジゴロの話題につなげましたけど(くるしい)、やはりジゴロには、どこか楽天的なちらんぼらん感がほしいものですが、これって、「イギリス的な」資質とまったく対極にある要素では。ジュード・ロウは「A. I.」でジゴロをやりましたが、あれはロボット役だったし。イギリス男という設定でのジゴロは、考えすぎたり屈折しすぎてたりして、ちよっと無理がありそうですね。あ、でもその資質が「異国的」魅力になる外国(日本とか)を舞台にすればアリかも。「運命の女」のオリヴィ

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書翰的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来10数年、友情を育む。イギリス文化にフランス映画。専門分野をベースに交わされる映画話メールの面白さに眼をつけたキネ旬編集部により、連載として誌面展開されることに。

ドーバー 越えて

齋藤敦子
中野香織



なかの・かおり 大学院でイギリス文化を学び、1989年と1994年にケンブリッジ大学に客員研究員として渡英。イギリス的偏見をこよなく愛する中野にとって、齋藤氏は、フランス的横紙破りなコメントで軽くないしながら映画に対する新鮮な視点を提供してくれるメンターのような存在(ほめているのか?)。日本経済新聞で「モードの方程式」連載中。著書に「スーツの神話」、訳書に「性とスーツ」ほか。「ENGINE」誌での連載「映画のなかの英語」を終了したばかり。

カット・井上陽子

エ君がアメリカ女のコンスタンス(貞淑の意味あり)を落とせたのも、フランス訛りの英語をしゃべってたことが大きいし。ジゴロ(gigolo)がフランス語で、「ジゴレット(gigolot)」「街の女」から派生した言葉との指摘、わたしもはじめて知りましたが、ということは、かの「ジジ(Gigi)」もジゴレットに由来する名前なんだろう。ヴァンセント・ミネリの「恋の手ほどき」(原題Gigi)も「ジゴロの母」という視点で見直してみるとまた違った見方ができるかもしれないね(たぶん見ないけど)。

さらしに「ジゴロ」の語源を調べてみたら、「ジ」という言葉に行きあたりました。「急激に上下前後に動く」(すごい訳)という意味で、ま、ダンスのジグを想像すればよいわけですが、アメリカの俗語ではずばりセックスの意味だそうです。

で、この言葉が日本語にもなってるって、知ってました? 「治具(じぐ)」ですよ。「急激な上下前後運動」で日本人が連想したものが、大工道具だったわけですね。

「性生活に淡泊系」(対仏比)ないギリス人のさらに上(?)をいく、「性生活に枯淡系」(対英仏米比)な日本人。そんな日本を舞台にしたジゴロものなんて、やっぱりあまり考えられない。ということとは、「イギリス男のジゴロ」の活躍場所がない。ゆえに「イングリッシュ・ジゴロはありえない」。これが結論。いやはや、強引で失礼。